宗像

毎月一日発行
発行所　宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡支社　福岡市吉塚西林寺町　西林寺内
本社　京都市下京区油小路通六条北入　電話　京都(35)九六六・三二〇番　(ハ六六・三二〇番)　(ロ三三〇・九六六九番)

宗像の元旦

新なる年に祈る

昭和四十五年一月一日、新年を迎えた宗像大社では、午前二時総社地主祭、午前三時より高宮地主祭並に高宮祭、午前六時に元旦祭が斎行され、皇室の弥栄と国家鎮護、五穀豊穣、産業文化交通の発展と繁栄が祈念された。

また午前零時を期して交通安全、業務繁栄の六所願祭が斎行されたが、祈願者が陸続と続き、営営終日に亘って絶間なく祈願祭が斎行された。

この間、一般参拝者の打つ拍手の音も絶ゆることなく、神前に真摯な祈りを捧げる人々の清々しさで社頭は満ち溢れんばかりであった。

例年のことながら大晦日の大祓式によって一年の罪穢を祓い、清らかな心身で迎えられる新年。宗像の元旦は大晦日の暮色が境内を覆う頃から始まる。この頃から初祈願を待つ車輌は徐々にその数を増し、闇の訪れと共に自動車のライトは増々ふえて行く、その光は源を国道三号線に発し、吸い込まれるように宗像道（県道）に流れこむ、そして境内へと向きをかえ光がその中で渦巻いている。時が経つに従って、流れは光の大河と化して行く。

その光景のすばらしさもさることながら、夜目にもあざやかなライトで赤々と映える境内、浮き出された神門や大鳥居、それら全ての美しさと壮厳さに感嘆する。

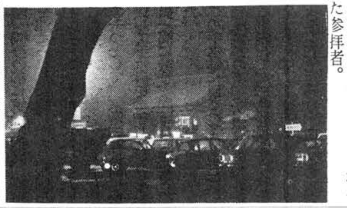
午前零時、往く年に別れを告げ来る年を迎える時、太鼓の音とうとうと鳴り響き、初祈願祭が行われる。

ある人は交通安全を、或る人は商売繁昌家内安全を と思い思いに様々な祈りを捧げたことであろう。

年頭に際し心を新たにして神前に誓をたてた人も多かった事であろう。これらの真摯な姿は毎年くりかえされる。しかし、一年の間忘れることなく 祈る心、祈りし心、誓いし時の心をまっとうし得た人は少ない。今年こそはその心を忘れることなく堅持し、参拝者の一人一人がもれなく宗像大神の御加護をいただき、発展と多幸の年であってほしいものと念ずる。

この日の参拝者は延べ数十万人。

この祈りのままに二日、三日の午前九時からは新年大祭が斎行され、広く国民の平安無事と弥栄が祈られた。



写真右、元旦の神門附近夜景。写真左、拝殿、外拝殿から境内までびっしり埋めた参拝者。

年末年始には真心からなる初穂料をご郵送いただきました。
右は昭和四十五年元旦大祭に神前にお供えして皆様の御隆盛を祈願致しました。
ここに新年の祭儀を盛大に滞りなくご奉仕出来ましたことを御報告申し上げます。

宗像大神全国総本宮　宗像大社
特別崇敬者各位

論説　その宝船

寒風すさぶ師走の両橋、元禄の俳人、其角が渡っていた。たまたま、年末すす払い用の箒を売りあるく小者の風体に出会った。誰あろう平素から交際のある俳人仲間、赤穂浪士の大高源吾であった。すれちがいざま、今日もなお残る有名な一句が出る。

「年の瀬や水の流れと人の身は」と。そのあとを即座につづけたのが、大高の「あした待たるるその宝船」であった。宝船は吉良邸討入りの素志貫徹の日が近いことを暗示しているようである。

其角ほどの人物、宝船の意味もわかったであろう。然し、ここで考えられることは、待ちに待ったその宝船が現われないかも知れない。現われても、長蛇を逸する結果となって、その宝船は姿を見ただけに終るかも知れない。命を賭けてではない。命を捨ててである。宝船を得るためには、統領大石良雄はじめ、浪士一同、慎重な計画によって動いたことであろう。演劇では担ぎ喝采の派手な舞台であっても、悲壮な快挙であったにちがいない。

大高源吾は、俳号を素堂と称した。浪士の中では、武勇も秀れていたであろうが、文人としても異色の存在であった。

「山を抜く力も折れてけさの雪」は、子葉の辞世の句と伝えられる。仇討ちを果して、張りつめた長い間の緊張が解け、男子の本望成就の感激が今しみじみと、味わわれると云った心が、この句の中に生きている。

辞世といえば、大石良雄の一首「あら楽や思ひは晴るる身は捨つる浮世の月にかかる雲なし」が思い合わされる。この歌の最初の一節は、あら楽し（たのし）の誤かとの説もあるが、ある江戸文学研究者の意見では、あら楽は心の放逸状態を表わした当時の通用語であった由である。

それはとも角として、この大石の辞世は、四十七人の同志全員の心持を詠んでいるようで、その意味では赤穂浪士の辞世と言えよう。

大石ほどの城代家老の重き地位にある臣下としては、当然先頭に起って吾の無念を晴らす決意に燃えたのは当然であったかも知れない。それが封建の世の武士道として伝承されてきた精神である。

浪士の一人に足軽の寺坂吉右衛門が参加していた。同じく浪士の一人、吉田忠左衛門の組下で、当時の身分としての足軽は、一人前の士分ではなかった。主君の恩寵をうけることも浅く一藩の重役から優遇される道もなかった。

その彼が敢然と命を捨てて、主家の危急に処する士たちに加わろうとして、大石に願い出たのである。さすがの大石も驚いたであろう。主家没落とともに多くの足軽程度の身分の者は、身の安泰を求めて四散したのに、ただ二人寺坂が同士の盟約に加わることを、いさぎよしとした。その真情は汲まれて、苦難の途に同行することになった。晴れ姿でもあった。

吉良邸引き上げの一行は、大目付仙石伯耆守の邸にとどけ出たが、途中大石は寺坂を行列からはずした。どうせ士分の者は、犯罪者として幕府の処罰をうけねばならぬが、寺坂一人をはずしてもまさか、足軽の彼まで追及もすまいと思ったのであろう。一面は真情を汲んで、広島の浅野本家に一件の報告のため、使いを命じたのである。

寺坂は命ぜられた如く、広島の浅野家に赴きその他の所用を果して江戸に帰ってきた。四家に預けられた同士は、全員切腹を命ぜられて、既にこの世になかった。幕府は彼を捕えなかった。むしろ赤穂浪士に対する社論の同情を深く考えたかも知れない。

今さら追腹もならずと考えたか髪を切って泉岳寺に眠る同士の菩提を弔う決心をした。八十余歳の天寿を全うするまで、墓守りとして変りなき奉仕に生きたのである。一同と共に切腹はしなかったが、彼もまた強烈な信念と一貫した節操の武人であったことにかわりはない。

両国の橋上、その宝船の一句を思い出して、大高をはじめ大石、寺坂ら三三の赤穂浪士について、その所業の一端と心情の一面を述べた。現代の世相は大きく変ったが、赤穂浪士の快挙は今なお国民に忘れられてはいない。映画演劇の人気が、それを語っている。その宝船は今後も長く姿を消すことはあるまい。

新春を迎え　復興事業愈々本格化

当社復興事業は、昭和四十五年の新春を迎え、愈々本格的工事施工の段階に入るが、設計担当の伊藤奚太郎建築設計事務所では、目下設計書の作成に大童わである。昨年来、東京の事務所から数度に亘り、現地を来訪され、関係者と種々協議の上、何回となく設計の修正変更が行われてきたが、冒頭着工の祈願祭については、昨年末、最終的に構想が確定し、引続き詳細設計に入り、二月中旬までに完成、建設担当の鹿島建設株式会社に手渡されることになっている。同社では、この設計書に基づき、三月一日付を以て着工の予定で、これに先立ち、二月中旬から、監督事務所、飯場の建設、資材の搬入等の諸準備が進められ、年内完工を目指し、工事は急ピッチで遂行される手筈になっている。この祈願殿は横六十六米、縦二十五米、高さ十六米の鉄筋コンクリート造りで、正面に交通安全と御協賛を願いする次第である。

阿蒙少言

この正月の東京でのオモチ料理の話が、テレビで放送されたことがある。鯛はアフリカ産、えびはメキシコから、蒟蒻はインドからと説明されては、江戸前の生きのよい料理などと言えばウソになる。江戸近くの海で獲れた新しさを誇ったものだが、印度洋や太平洋を越えてくる魚では、江戸前どころか、アフリカ前メキシコ前で、威勢も優の江戸ッ子もほとんど外国産に慣われて、江戸育ちの意気もしだいに失ないわけ。しかし東京の海が今日のように汚れては、生きのよい江戸前が得られるわけはない。浅草のりと言っても、浅草近辺はのりの生産など思いもよらず、韓国産に浅草の名が冠されている。

時代の変化、都市の膨張とともに、のりをより仕方がない。魚類や野菜、果物まで国際的になってきた。政治産業、その他学問、芸術などが一層国際的色彩を増してゆくのは、全く当然の帰結である。人間の欲望が生活の豊かさを求め、生活の豊かさに恵まれると、更に新しい欲望が人間を動かす。この道理は古今東西かわりなく、かくて世界は更に大きく発展すること、今日東京人がアフリカ前の鯛を食っているのでもわかる。今年は万国博、これが種々の意味で国際的色彩を、わが国の各方面に強めてゆくだろう。言葉一つを取り上げても、外国語の巧みな人が急速に増加する。目下外国語を熱心に勉強している若い女性は、著しい増加の傾向にあると聞く。ある言語学者が、外国語のうまい民族は、同化され易く自主性を失い易い、日本人は語学が下手だから安心だと言ったことがある。然し、どの面でも海外との協調共栄を図らねばならない時、狭量の門を閉めてはならぬ。但し、自主性は断固堅持して。（白雲）

第10回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

田　熊　鷲頭かつ代
冬の菜を漬けこむ場所指先のありともみえぬすり傷にしむ
深　田　中野　節子
訪なへば巻ふ巻きもあらなくに閉ちし襖に猫の爪跡
大　井　村山　幸生
ほほえまし母に習ひて幼子のおぶる祝言あげなくして
久留米　篠田太郎坊
泉水に射してはかげる冬の日に泳ぐともなく遊む鯉の列
田　熊　小野角次郎
青海波初日の畑に年花を飾りて祝ふ三宝添えて
田　熊　小野かをる
新春の朝に賀状ながむれば昔なつかし顔も浮べり
戸　畑　安川　浄生
うとましく寒き曇日ク晴れて迫る霙の中の朱霙
田　久　小方　実
（ある人の結婚日に）
うるわしき家を築くと人の世の雨も風ものりこえてゆく
名　残　竹原　圓
走りゆく車の上に営員の友が頼むと手を振りており
勝　浦　永島　文子
諸人の厚き情につつまれて繁降る夜半さめざめと泣く
田　島　吉武　武雄
頑張と孫は試合の剣道に竹刀持つ手に輝く瞳
香　椎　桜井　ツ子
新しきいのちを待つて陽の縁に縫ふ淡いろのネルが柔かし
武　丸　原田　リノ
その頃の西の都の名恥しず樽へ大いなる都府楼のあと
徳　重　滝口　千代
交通の事故なき願いこもりたる守りを遠き吾子に送りゆる
福　岡　林　まつえ
冨士見んと三保の磯さまよえば羽衣の曲舞い居る心地
宮　田　片山　一
炬燵より電気毛布の床に入り物なき思ひそ八十年の夢
赤　間　白木うめの
雪肌をくれないに染め碧突にさへざるものなし暁の富士
津屋崎　麦野　時雄
一日に二度は必ず散歩するのりひびしげる引潮の浜
津屋崎　柴田タネヲ
年の瀬を如何に過ごうん人々を思ひめぐらす臥床つめたき
田　熊　鷲頭かつ代
冬の菜を漬けこむ場所指先のありともみえぬすり傷にしむ
深　田　中野　節子
訪なへば巻ふ巻きもあらなくに閉ちし襖に猫の爪跡
大　井　村山　幸生
ほほえまし母に習ひて幼子のおぶる祝言あげなくして
久留米　篠田太郎坊
泉水に射してはかげる冬の日に泳ぐともなく遊む鯉の列
田　熊　小野角次郎
青海波初日の畑に年花を飾りて祝ふ三宝添えて
田　熊　小野かをる
新春の朝に賀状ながむれば昔なつかし顔も浮べり
戸　畑　安川　浄生
うとましく寒き曇日ク晴れて迫る霙の中の朱霙
田　久　小方　実
（ある人の結婚日に）
うるわしき家を築くと人の世の雨も風ものりこえてゆく
名　残　竹原　圓
走りゆく車の上に営員の友が頼むと手を振りており
勝　浦　永島　文子
諸人の厚き情につつまれて繁降る夜半さめざめと泣く
田　島　吉武　武雄
頑張と孫は試合の剣道に竹刀持つ手に輝く瞳
香　椎　桜井　ツ子
新しきいのちを待つて陽の縁に縫ふ淡いろのネルが柔かし
武　丸　原田　リノ
その頃の西の都の名恥しず樽へ大いなる都府楼のあと
徳　重　滝口　千代
交通の事故なき願いこもりたる守りを遠き吾子に送りゆる
福　岡　林　まつえ
冨士見んと三保の磯さまよえば羽衣の曲舞い居る心地
宮　田　片山　一
炬燵より電気毛布の床に入り物なき思ひそ八十年の夢
赤　間　白木うめの
雪肌をくれないに染め碧突にさへざるものなし暁の富士
津屋崎　麦野　時雄
一日に二度は必ず散歩するのりひびしげる引潮の浜
津屋崎　柴田タネヲ
年の瀬を如何に過ごうん人々を思ひめぐらす臥床つめたき
福　岡　高橋　傘翁
贈られし歳暮の清酒十数本これを開けようと惑く染しさ
村山田　吉田佐市郎
老いし身は物見旅行も良ならず花壇作りて四季を楽しむ
大　井　安部　重郎
朝まだき峡の山々片照りて里の家々仕事始めし
大　井　安部　静子
畑すみに植えしを陽のみかん木消毒終われば鯛釣の如
福　岡　麻生　初栄
我が宿の寂びたる暮き淋しにトトラックしげく絶ゆる間のなし
津屋崎　芥野フサ子
憂きことも去年とともにけりり除夜の鐘しづかに祈るあすのしあわせ
徳　重　石松やす子
新玉の年立かわる今日よりは家にも身にも幸あれそかし
戸　畑　田中ハツセ
かくしゃくと十七人の冨孫に八十三と記し賀状あり
東　郷　有吉　春子
闌竹の根を掘り払ひ水仙の球根呉れし陽場のおきなよ
宮　田　北原　君子
車比賀座にとし忍出てきし子が大きタルマに緩起を祝う
戸　畑　藤井　孝子
真白き雪に埋れし吾庭は池の鯉きも影さ潜めて
朝　町　井上陽之助
心あらむ人に忍ばはる青新の里のクラブ（ゴルフ）の初春の景
原　町　中村　幸
笛の如き声して刻そうくりり縁日に買ひし鶯育ちつつ
門　司　永島　哲夫
三年して立つ練習を初めたる交通事故の子に年明けぬ
吉　田　占部　由久
空と海も青に染めてしづしづとのぼる初日の神々しよ
福　岡　江崎　琴子
極寒のシベリヤの野をきけ飛来せし鶴の乱舞や出水市の空
武　丸　立石ろせ乃
笛の如き声して刻そうくりり縁日に買ひし鶯育ちつつ
門　司　永島　哲夫
三年して立つ練習を初めたる交通事故の子に年明けぬ
吉　田　占部　由久
空と海も青に染めてしづしづとのぼる初日の神々しよ
福　岡　江崎　琴子
極寒のシベリヤの野をきけ飛来せし鶴の乱舞や出水市の空
武　丸　立石ろせ乃
妹が必殺して逝きし娘の縁談とこの嫁く目近
津屋崎　柴田タネヲ
年の瀬を如何に過ごうん人々を思ひめぐらす臥床つめたき

交通安全を祈る

―県警全パトカー参拝―

昭和四十五年一月一日午時、当社神門前の大駐車場は初詣での車の光で不夜城の観を呈していた。入る車、出る車、凡ての車に新年を寿ぐ笑顔が満ちくーている。午前二時国鉄門司鉄道管局長二行の祈願祭が行われる。門鉄管内の無事故を祈るこの初詣では年頭の重要行事の由である。神の加護のもとに達速なる日本の鉄道の運行はなされ、乗客の安全は護られて行く。

六日、午前十時、福岡県交通安全協会の交通安全祈願祭が執り行われた。九時三〇分、初春の陽光がきらめく中を県警交通機動隊のパトロールカー、白バイが拝殿横の駐車場に塡し、県内各ブロックの交通安全協会の車が神門前に整列する。定刻、植樹交通安全協会長、県警本部長外各役員が昇殿し、外拝殿には機動隊員百名が整列し大鼓を合図に祭典が行われる。

「…方の通路穏に平けく安けく往通はしめ給ひ、此年を吉年の美年と守り恵み幸ひ給へと恐み恐みも日す」祝詞奏上が完り榊根会長の敬度な祈りが捧げられる。引続き、機動隊車輌の清め祓い を行う。また恒例の直会は神饌の旅館に於て行われた。席上「宗像さまのおかげをいただいて無事故無違反の毎日を送らせて頂いています」と語っていた人が印象的であった。

七日、十日共同二両、西鉄の紺の制服で埋めつくされた。この両日、自動車局と電車局の参拝が行われたのである。「祈無事故」と墨跡もりりしきたすきをかけ、拍手の一つ一つに車の無事故、乗客の安全がこめられている。かくしてその祈りが明るい日本の社会を造る原動力となっていくであろう。

成人の日

一月十五日は成人の日。この日は厳しい寒さで、朝から雪がちらほら。それでも成人達はイカス背広、美しい晴着に身を正し喜々として寒さなんかはふっとばす。その若さはなんとも頼もしい。

この日は全国各地で多彩な催しがなされ、宗像でも一足先に式を行なった大島村を除く四町で、講演、植樹、ダンス、マラソンなどが行われ、千八百名程の成人者を祝した。中でも玄海町では宗像神社で成人祭、記念植樹などがなされ、成人としての自覚がたかめられた。

いつも見る姿がこの日は異って見える。やはり成人という自覚がそうさせるのか。二、三抱負を聞くと、仲々しっかりした答が返ってくる。〝最近の若者は〟とよく耳にする、しかし大丈夫。それより、若者が何を求め、何を悩み、何を欲しているかを知るべき。この日の喜びと抱負が受け入られる世の中にしたいもの。それが本当のお祝いかも知れぬ。

恒例の初会合

県庁宗像郡人会

去る一月十日、県庁宗像郡人会が福岡市社会福祉会館に於て開かれ県庁に勤務する郡出身職員並びにOB等六十数名が出席して、恒例の初会合は盛大であった。当日は土曜日とあって、各課に勤務する会員達は交代に大部分が出席、午後一時半から新年の互礼会が行われた。

席上、県林政課長である伊藤会長は新年の祝詞を述べ、県庁に奉職する宗像郡人達がお互いに親睦を計り、郷土発展のために、又県政諸事業に対して、郡出身者の間に親しい潤滑油ができるよう先輩、後輩がここに仕事を離れて交流され、より良い人間関係を結ばれるようお願いする。毎年新入が入りますので、宜しくと挨拶された。

来賓として、新出光石油の出光会長、村田県議、各町村長及び各町村議会議長が出席してそれぞれ祝詞を述べられ、当社からは久保宮司が出席して当社復興の概要を説明した。

この後、祝宴に入り各人が自己紹介を行い、なごやかな内に終了した。

献米奉告祭並に鏡餅開き行わる

新春のさる十三日、午前十時より恒例の献米奉告祭、並に鏡餅開きが盛大に斎行された。

この行事は旧年中郡内の氏子各位より奉献された新米を神前に供え、豊作を祝うとともに新年の五穀豊穣を祈念するものである。当日は氏子評議員、総代、一般参列者等百五十余名の多数の方々が参列。斎主祝詞奏上の後、奉幣使の祝詞が奏上された。これは郡内各校区の代表が各年々に交替で行う奉幣使で、今年は当番である田島校区の代表者中野武雄氏が行い、ひとつおりなく祭典を終了した。

引続き斎館にて鏡餅開きが行われた。この鏡餅のいわれは、神棚などにある金属製の円鏡にかけた祝いものである。この餅を食べることを「餅を祝う」又は「雑煮を祝う」ということで、鏡餅の神聖視とともに特別な「祝の日」の食べ物として尊ばれる。

今年は約一、〇〇〇個の餅を準備していたが、「雑煮」の「ぜんざい」にされ、参列者の皆さんから喜ばれ、縁起ものとしてまたたくまに品切れとなる盛況さであった。

三十五トンの大手水石

八幡宗像会が奉納決定

八幡宗像会の新年総会は去る一月二十七日夕刻時から北九州市小倉北京飯店で開かれた。

会員八十人名の内、六十余名が出席、開会の辞に続いて還暦、喜寿を迎えられた会員に記念品が贈られ、会務報告が簡潔になされた。

この後、八幡宗像会の本年度事業の一つとして、宗像大社復興に協賛して手水鉢を奉納したい旨を会員一同に計り、異議なく決定された。

この手水鉢に目されている石は、花尾城跡麓下、字屋形船の地にある御影石で、三角形おむすび状をしており、一辺が三メートル、総重量三十五トン余りである。石のある山は八幡宗像会岡崎会長の土地であるため、切出運搬が順調におこなえる見込とのこと、来る三月か四月頃宗像大社で手水舎の位置を決定してから運搬する予定であると報告された。

この後、遅れて出席された新入会員の紹介、当社久保宮司の大社現況説明があって無事終了、懇親会に移り、岡崎会長の肝入りでキレイどころが出張してのサービスに導まされ和やかな宴が続いた。

若人の健脚を競う

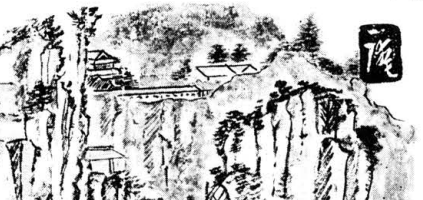
宗像マラソン大会

第十三回宗像マラソン大会は、去る一月十八日（日曜日）好天のもとに盛大に挙行された。

宗像郡体育協会、郡青年団協議会主催、西日本新聞社、宗像大社後援のこのマラソン大会は本年で十三回を迎え、参加者も福岡教育大・宗像伝習農場・ロイヤルKK・高千穂製紙・福岡市役所・八幡大・九産大・糸島高校・大濠高校・海老津郵便局など、多人数参加を始め、県内各地からの個人参加で二百余名を数えるほどの大行事となった。

競技は五千米と、一万米の二種目で中学生・高校生・青年・一般学生・一万米の五部に分かれて各々健脚が競われた。

特に一万米は自由参加。今年五十五才の山本忠二郎氏（福岡市住）が参加され完走し、老人健在の意気を示されるなど、熱気はらむ中にも宗像マラソンならではの、ほのぼのと明るい大会であった。



宗像談話室　家庭のお祭りとお祝い（三）

神社のおがみ方

とっては、二種以上の異質の宗教を同時に信奉する日本人の態度は、解釈に苦しむとの感想を聞きます。家庭においても神道のまつりの神だなと仏教のまつりの仏だんとが同居して少しも不自然を感じないで、朝夕いずれもおがんでいる様子は、彼等にとって理解しにくい点かも知れません。これは仏教伝来以後、長い神仏習合の思想の発展を経過して、国民の精神生活に矛盾をいだかない宗教的情操が養われてきたからで、一べんの宗教学的理論では追究されるものではありません。

氏神さまはじめ、民族の先祖、国家の功労神、繁栄の守護神は神さまとしてまつり、血縁的の身近な父祖縁者の霊は仏教式に仏だんにまつる風習はそれで結構なことでありましょう。一家に二宗教の同居に話題と聞かないところです。然し、信仰の自由はあくまで個人の精神生活と密着する宗教の自由であって、家庭のまつりの慣習とは別個に、家庭の一員が独自の宗教を持ってよいし、それがため家庭のまつりを破壊することもないわけです。強制は当然いけないことでありますが、逆に新興宗教等にとりかまって、その教義に患実になろうとするあまりに、家庭のまつりを頭み、神だなに反対したり、仏だんを棄てたりすることは、他の人たちの心を傷つけ家庭の和楽をみだじる狂信と言えましょう。正しい信仰は秩序をみだし、他の幸福をみこわす宗教の中には存在しない。邪教的狂信は深く自ら戒めなければなりません。

二、神社参拝の作法

㈠ 神社のおがみ方

神社を大切に持ちつづけ、その祭りを絶やさなかった国民の伝統は、風土と国民性から生まれた美風でありましょう。民族の祖先、父祖の霊魂を神としてお祭りする民族的信仰が、有史以前の神話伝説の時代に氏神崇敬の思想の伝承によって、神社となったのであります。即ち、わが民族の道徳思想と宗教的信仰の中心が神社で、儒教をはじめ、外来の思想並に仏教などの伝来の宗教の影響が全くない時代に、純粋な民族的信仰として成長した国家的、民族的伝統は、現代までなお国民の精神生活の中に強く生きつづけてきたものと言えます。

㈡ 神社参拝の作法

神社を大切に持ちつづけ、その祭りを絶やさなかった国民の伝統は、風土と国民性から生まれた美風小異ですが、船内、工場、店舗、邸内祠（ほこら）等の構造がちがったり、多人数が一度に拝礼する方法をとったりする事情を考えて、木札、大きな木札、神像軸、木像土像等が神社から出されることもあります。特に昨今の交通事情から、その安全を守護していただく念願から自動車備付の種々のお守りも見うけられ、中にはマスコット、装飾品とかわりないものも現われてきましたが、極端に信仰上のお札の意義を没却した形になってはならないと思います。

㈢ 神だなと仏だん

わが国を訪れる外国人が、日本人が神社に参拝したり、寺院をおがんだりする信仰上の風習に疑問を持つそうであります。

特に一神教であるキリスト教徒に仏教伝来以後、長い神仏習合の思想の発展を経過して、国民の精神生活と密着する宗教の自由であって、家庭のまつりの慣習とは別個に、家庭の一員が独自の宗教を持ってよいし、それがため家庭のまつりを破壊することもないわけです。強制は当然いけないことでありますが、逆に新興宗教等にとりかまって、その教義に患実になろうとするあまりに、家庭のまつりを頭み、神だなに反対したり、仏だんを棄てたりすることは、他の人たちの心を傷つけ家庭の和楽をみだじる狂信と言えましょう。正しい信仰は秩序をみだし、他の幸福をみこわす宗教の中には存在しない。邪教的狂信は深く自ら戒めなければなりません。

許斐三代(四)

許斐の旗風

（其の三十三）

許斐三河守氏任討ち取ったる敵の部落迫進んだ。既に敵方の大将は討ち取られ、副将多賀彦四郎の姿も無かった。

敵軍は総崩れとなり、宗像党は引き続いて立花山の麓迄ひき進んだ。

立花山に籠っていた花方が驚いて後方の岩屋城に後詰をしている高橋三河守鑑種にそれと注進した。高橋は事の次第に驚き、宝満山の本城にまで陣構えを命じた。その勢三万余騎と聞こえた。

十数日の対陣の後、敵の後詰の多い事を聞いて立花山の攻撃を断念した宗像党は夫々の本城に引揚げた。最後の一押しを控えなければならなかった宗像党の無念さもさる事ながら、時の勢力の均衡は此のへんの処があったというべきであろう。

この直後、宗像方では氏任の行動について若干の論議があった。単独の抜け駆けではないかという批判も出たが、三河守氏任の戦機を判断した行動がなかったならば、しかも自らの戦死をかけての働きがなかったならば、此の度の大勝は有り得なかったのではないかとの論議もあり、事は可否なく落着した。

戦国の習いとはいい乍ら、常に左顧右眄する、またせねばならぬ事に対する憤りこそ、弱者が自主性なく走狗するがごとき、態度を痛烈に批判したのが氏任の情熱であった。

吉田、大和らの三百余騎が氏任勢が勝ち誇った勢に乗じて攻め返して来るところであった。

「許斐三河守氏任討ち取ったる」の報に宗像党の面々が怒りにふるえた。異常な緊張感が戦場をつつみ、敵方がこれは気付いた時には遅かった。敵勢は今度こそ本当の退却の好機を失なってしまった。

宗像党は敵の残党に殺到したまま青柳の部落迫進んだ。既に敵方の大将は討ち取られ、副将多賀彦四郎の姿も無かった。

敵軍は総崩れとなり、宗像党は引き続いて立花山の麓迄ひき進んだ。

立花山に籠っていた花方が驚いて後方の岩屋城に後詰をしている高橋三河守鑑種にそれと注進した。高橋は事の次第に驚き、宝満山の本城にまで陣構えを命じた。その勢三万余騎と聞こえた。

十数日の対陣の後、敵の後詰の多い事を聞いて立花山の攻撃を断念した宗像党は夫々の本城に引揚げた。最後の一押しを控えなければならなかった宗像党の無念さもさる事ながら、時の勢力の均衡は此のへんの処があったというべきであろう。

この事の結果は、我が身を犠牲にして迄も家中の武士に与えた意義は絶大なるものがあったといわねばならない。

盲目的に驥尾につくことをもって能事終れりとした時人に対する武人の理想主義の光は、長く宗像家中にその光芒を放った。

反骨精神を失った時代人に与えた影響、これに過ぎるものはあるまい。

―　―　―

この事件の後、宗像党は氏任の勇戦に遭い、かえって破れて討死を遂げている。

越えて永禄四年四月十八日、豊後勢（大友）が大挙して許斐城に押しかけた。

吉弘鑑理、奴留湯主水、立花但馬守鑑載らおよそ千五百余騎であった。

これに対する守将は占部尚安の騎下わずか四百余騎である。

敵は新手を入れ替え入れ替え、攻めたてた。しかし城も歴戦のつわもの揃いであらゆる手段を用いて、防戦した。特に弓射をよく用いた。百余人の射手が絶好の時機に集中射を浴せる。

守兵はわずかだが作戦の巧妙さに寄せ手が攻めあぐねた。

時間はいたずらに経過する。このままでは許斐城を指呼の間にする宗像の諸方からつい擡頭が現われるかわからない。

一気に城を抜く目算が狂っては、早、それ以上の作戦遂行は不可能である。

敵は囲みを解いて引き揚げた。

（つづく）

許斐氏賢（うじかた）

氏任の弟に左京亮（又は左近丸）氏賢という人がある。この人は氏任の弟の宮内少輔宗宝氏鏡の子にあたり、矢張り許斐一族の一方の大将であった。

弘治年中から、許斐城は宗像対大友方の千戈の巷となり、或る時は大友軍に奪取され、或る時は宗像党の回復する処となっていた。

永禄三年七月、前段で述べた通り大友方の大将多賀美作守隆忠が、これも大友方の立花氏を後楯として許斐城を攻撃し、守将占部尚安、尚持父子、及び許斐氏任らの奮戦に遭い、かえって破れて討死を遂げている。

草浦柴舟 作
福田長庵 画

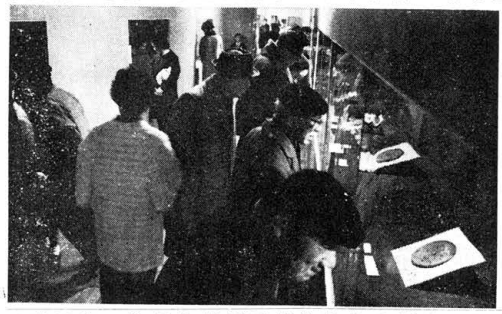
宗像大社国宝展
九州初公開終る
――毎日新聞社主催で――

「海の正倉院」――まぼろしの沖ノ島として知られる、宗像大社沖ノ島出土の国宝が、初めて九州の地で公開され、好評を呼んだ。この展示会は、毎日新聞社の主催により、小倉井筒屋の別館で行われ、一週間の短期間であったが、約二万名の見学者を動員させた意義ある展示会であった。

当社の宝物は、これまでに東京（出光美術館）、大阪（市立博物館）等の大都市に於ける展示会は行ったが、地元九州での展示会（宗像大社国宝展として）はこれまでに行われた例がなかった。

ましてや、第二次沖ノ島調査が、昨年十月にスタートし、学者間は云うに及ばず、一般の人等をもびっくりさせるような、古代祭祀の品々が出土し、古代の祭祀形態まで知り得る資料をも発見出来たとあっては尚更のこと関心を寄せざるを得ない。

更に今回の展示会では、第二次調査に参加した、毎日新聞記者の目で見るレポートとも云うべき数多くの写真が展示されていた。中でも沖ノ島での生活そのままの佐藤市五郎翁の写真をはじめ、オミズナギドリの生態写真、更に島内での調査状況等々、稀に見る写真がより以上に沖ノ島を物語ってくれた。



此の間の拝観者は学生から御老人に亘る広い層で、買い物かごをさげた主婦なども目だつなど、その関心の深さに主催者側を感激させた。

尚当社では、この展示会のため、昨年末より宝物館を休館させていただいておりましたが、新春の十五より、沖ノ島出土品、特に霞襲の名点と共に郡内氏子各位の御協力に依り、郡内文化財の何点かを展示し、開館致しました。開館時間午前九時、閉館午後四時半。

写真は熱心にみいる拝観者

話題の新車をみる (三六)
ルーチェロータリークーペ

ロータリーエンジンが1588年伊国フメリーによってその原型を発明以来、おむすび型のローターが回転するとSS、そして旧秋にはルーチェ云う簡単な構造であり乍ら、約400年余もレシプロエンジンに遅れを取った理由は、技術上の困難さに幾度も立ち塞がれての事であったが、ようやくその困難を克服して日本に於いても1967年5月に世界初の2ローター式エンジン搭載車マツダコスモを東洋工業が発売、次にファミリアロータリークーペ、そしてファミリアセダンに載せて、ファミリアロータリークーペと云うように植みこまれて、レシプロ車と何ら変らない人気を得るに至ったのである。さて今回はルーチェロータリークーペについて簡単に紹介しよう。この車は4年前の東京モーターショーにRX87と紹介され、車体はルーチェに似た感じを持ち、ルーチェより全長215㎜長く、全高に於いて45㎜低く、センターピラー三角窓を除いた型は流麗である。スーパーデラ車では冷暖房、除湿装置、パワーウインドウ、パワーステアリング、チルトハンドル、カーステレオと云うようにこれ以上望む事のない程、贅をつくしている。面白いのは時計を計器盤のそれもコンビネーションメーターの真ん中に組み込んでいることである。ロータリー車のエンジンブレーキの効きの弱さをカバーしてブレーキ系統はタンデムマスターシリンダー、マスターバック付、前ディスク、後リーディングトレーリングとなっている。

総排気量655cc×2 最高出力126Ps／6000rpm、前進4段プルシンクロ、後退1段である。

× × ×

前日立製作所会長
倉田主税氏を悼む

氏は、明治三十二年、倉田主来造の長男として宗像郡神興村津丸に出生、小倉工業学校から、仙台高等工業学校機械科に進み、明治四十五年卒業と同時に、日立作所会長、倉田主税氏が急逝された。昨春、東京宝満会（在京福岡県出身財界人の集い）の一員として当宮に参拝された折の、氏の元気な御姿を知るものには、この度の訃報は、正に晴天の霹靂であった。氏の生前の御業績については衆知の通りであり、本誌でも、先年二十数回に亘り「日立と共に五十年」の標題で、倉田主税会長の半生記を連載したが、ここに簡単に氏の略歴を紹介し、その偉業を偲ぶよすがとしたい。

去る十二月二十五日、前日立製作所会長として、倉田主税氏の創立者であり、後に初代日立製作所社長となられた小平浪平翁にめぐり会われるのであるが、この邂逅が氏の運命を決定づけ、その後の氏の歩みは、即、日立製作所の興隆の歩みであったといっても過言ではない。小平翁は、日本産業の胎動期にあって、電気機器の国産化をモットーに、一途にその実現に向って邁進された偉材であり、翁の薫陶と知遇のもとに、氏もまた、この理想に向って創意工夫をこらし、多くの艱難を克服して、技術の向上と革新に血と汗の苦斗を続けられたのである。

昭和二十二年、衆望をになって、日立製作所二代社長に就任されたが、終戦直後の受難期に日立経営の最高責任者として、幾多の危機を克服して今日の偉容を築き、よく「世界の日立」たらしめられた経営手腕は高く評価されている。氏の一生はその古武士的風貌と相俟って、いかにも明治人らしい気骨に貫かれた生涯であったといえよう。正に「巨星落つ」の感が深い。

また宗像神社興事業にも心より賛同され、御支援下さっていた中、事業完成の日をまたずに氏を失うことは誠に遺憾である。ここに生前の偉業を偲び、心より御冥福を御祈りする次第である。

（写真はあり日の倉田氏）

神郡宗像
摂末社を訪ねて (八)
伊摩神社

玄海町大字吉田字安入寺に鎮座されているのが、伊摩神社である。当社より鐘崎に向って鎮国寺を右手に見ながら進むと、約二キロの所の左手に「伊摩神社」の社号標がある。社殿登り口、石階下の鳥居には、「織幡宮」の額がかかっている。石階、百十段、境内はしずかで、展望は吉田の里を一望出来る。

神社帳によると、

一、祭神　誉田天皇、武内大臣、事代主命、素盞嗚命。

一、由緒　正長元年建立。明治五年十一月三日村社に被定。祭神武内大臣八字安入寺無格社織幡神社トシテ、事代主神八川端二無格社恵比須神社トシテ、素盞嗚命八字向二無格社須賀神社トシテ祭祀アリシヲ、大正十五年五月

ヨリ字安入寺二移転とある。これによれば、明治以降、明細帳には伊摩神社とあり、大正十五年まで、田島村大字吉田字今ケ浦にあったが、同年大字吉田字安入寺の織幡神社に合併されたものである事が知られる。この織幡神社奉祀については、「筑前国続風土記拾遺」織幡社の章に、村の良弐町在。産神也。寛永元年鐘崎の本社より勧請す。祭礼九月九日。鐘崎浦の入江氏奉祀すと記されている。これで第二の鳥居の「織幡神社」の額の意味がわかる。又、伊摩神社は、鎌倉期年中下行事見るとと、五月五日の五月会、及び八月十五日の五月許可ヲ得テ、合祀ト同時ニ字今ケ浦放生会御供の条に、「いまの御馬二膳」とあって、両祭に伊摩社と波折社とが御馬を出して神幸に供奉している。

社殿は、本殿切妻造りで、拝殿あり。境内地六四二坪、氏子五三戸と明細は記している。

しずかな境内に立てば、「正長元年、宗像氏信建立せりと云う。按ずるに往古はさはかりの大社なりにや。……云々（筑前国続風土記附録より）」などみえるように、この神社のたたずまい、明りの一木、一石にも時の流れを感じる鎮守の森である。

× × ×

伯父の想い出
占部真太郎

日本経済新聞連載「私の履歴書」担当部長記者の説によると、伯父（私の母の兄）倉田主税は現代財界三堅物の一人だったとのことだが、決して木仏金仏ではなかった。

伯父は青年の頃から深く共鳴し、その運動に参加していた財団法人修養団に、二木博士の殁後乞われて理事長に迎えられ、度々伊勢の道場に行っている。創設者蓮沼さんはどえらい人物である。地におちた道義を回復し、日本の本然の姿を取戻すべく修養団活動に余生を尽している。「この精神運動が実を結ぶには五十年はかかろう」と聞いて白毛混りの頭髪、炯々と光る眼、筋の通った気柱固く結んだ唇、ゴルフ灼けした顔をしげしげ見直して八十才を過ぎた伯父もまだまだ元気で、五年、十年は健在だろうと頼母しく思ったことである。私も戦時中八幡製鉄所に在勤、一度は宗像神社で、二度目は若松脇田で修養団講習会をうけ、流汗鍛錬同胞相愛を叫び、総親和総努力を唱え、寒風の中を海に入ったなど、述懐すると、伯父の言葉には俄に力がこもって来た。「豊かな物質に恵まれた今日、何故に父子相呪、夫婦誅外、上下反目、労資軋轢、同胞相殺するか。夫婦は四人の父母を持つ、四人の父母は八人の祖父母を、八人の祖父母は十六人の曾祖父母を持っている。十代前は二千余人、二十代前は二百九万余人の祖先がある。故に我等は祖先幾千万の血と精神を受け継ぎ、子孫幾百万に伝える中継者である。我等夫婦の一善一悪は子孫幾百万人の品格にかかわる。責任の重大なるを思うと共に、同胞血縁の濃き感愛深っする」と蓮沼門三会集の一冊を開いての説話である。

然るに、最近の親子、肉親の断絶、人倫の頽廃や如何。その原因はどこに在るや、かって我等母の胎内に宿るや、父は胎教を信じて、その思惟温存を正しうし、自然にその感化を胎児に及ぼした。産れ出ずれば、母の懐に或は添い寝されて乳房を含み、母乳を飲んで育まれた。母の手縫の衣服をまとい、学校の通足ともなれば母の手製のノリ巻を携へ、節句には手作りのオハギを味わい、鎮守の神の祭には父の膝に抱かれてサーカスを見た。親の肌から直に受取った慈愛を血とし、肉として成長した。今になお頭の中、胸の内に懐しい愛着の絆の数々を思い浮かべることが出来る。然るに今の子はどうか。人工孵化で、産院で産れ落ちるや、標札付で喚び付け嬰児室に並べられ、母親の乳房からも離され、母乳を断たれて牛の乳を与えられる。退院後も親の添寝もなく、電気コタツ、哺乳ビンで飼育され、長じてもアパートの出来合の弁当、衣類、だんごをあてがわれる。映画館も成年者お断りの成人映画で、親子同伴は叶わぬ。こんなことで何の親子恩愛の絆が生れよう。断絶はここに初まる。翌水は益に戻らぬ。今更旧習に倣う訳にも行かぬが、今にして深く反省せねばどうなることか。此の頃の母親は産っても母乳が出ないそうな。母乳が育児に不要となった故先を思う努力をしないからであろう。かくて女性の乳房は乳児の為のものではなくなった。然らば誰が為に乳房があるか。云わずもがなと。どの辺からか、私が嘆ったことが、謹厳な伯父もその意を解って破顔無笑大きな椅子に身をそらし、暫く体を揺っていた。その姿が今も眼前に浮かぶ。まだまだ身も心も若々しく、五年、十年は立派であろうと信じて、今日は別れたのに。それから十日を経ぬ二十五日脳出血のため不帰の客となってしまった。惜様から伯父らしい大往生だとは云はれるが、未だ未だ元気でいて欲しかった伯父であった。（八幡化学工業株式会社専務取締役）

宗像伝説　其の九十八
三宅巡査の虎狩

宗像郡上西郷村畦町は三宅与三氏の出生地である。

三宅氏はシベリヤに出征し、金鵄勲章を拝受し、勲八等功七級に叙せられた。又三宅氏が世界的に有名な「金冠塚」の発見者である事は有名である。「金冠塚」とは、そのころ、人口十八万を擁したという新羅一千年間の古都で、慶州中に在る一王陵の墳墓と目されているのだが、既にその頃には、半壊の惨状を呈し、大正九年頃までは、研究者にすら一顧の価値もないものとされていた。しかし、この三宅氏によって発見された金冠塚の中から現れた珍貴とも夥しい副葬品のすばらしさ、それは硬玉製の曲玉、真珠、小玉、腰帯、耳鎖、食器類など、すべて真金を以てしたものが多かった。

大正十三年に浜田、梅原両京都大学教授の手によって「慶州金冠塚と其遺宝」に記され、「本古墳の発見品の如きは、独り本邦第一内に於て初めて見る処ばかりでなく、東アジア、或は全世界に於ても、最も著しい古墳発見品の一群と云う事が出来る」と称賛されたのである。また三宅氏は慶州に於て巡査であった時にも多くの功績エピソードがあった人である。その中に虎狩の話がある。

大正十一年十一月八日、京城で日本赤十字社朝鮮本部の総会が開催された。総裁閑院宮殿下は、この総会に出席され、其の御帰りに慶州にお立寄りになるとの連絡が、慶州九政里の駐在所の三宅巡査の所に入った。此の時、この駐在所に今一つの連絡が入った。それは「今朝大虎出て、私の子供がみ喰い虎のために、重傷を受けました」と、一人の村人がかけこんで来たのである。三宅巡査は其の事実を確かめて、「一刻も早く御道すじの危険を取りのぞかねばならない」と決心し、いろいろ手筈を整えて、その日の午後、百余名の勢子と五名の射手を選び、山の上に持ち場をきめて、大徳山のふもとから狩りをだした。勢子が山腹に達した時、一発の銃声が鳴ったのである。虎は山をかけのぼり、射手の間をくぐって、山の向こうへかけ下っていくのが見えた。三宅巡査はすばやく銃を取りなおして、虎をねらったが、早くてねらいがつかない。虎は勢子達を見おろしながら悠々と向かいの小山を登り始めたのである。三宅巡査はここぞと銃を取り上げて、ねらいを定め、祈るような気持で引き金をしぼった。「目で射つな、心で射つな、手で射つな、月夜に霜のおりるがごとく射て」ダーン、一発の銃声は百余名の祈りをうけて、山中に轟きわたった。

人喰虎は前足を折り、ゆっくりと頭を地にすりつけて倒れた。みごと命中したのである。かけつけて見ると、たまは首から口の中にぬけて、右の牙を打ちだいていたのである。夕方駐在所にひき上げた人々は、宅巡査の手柄を賞讃すると、巡査は、「私はただ」をとうねって、いつ引き金を引いたか、全くおぼえがありません。ただ、閑院宮殿下がお出になるという今日、これを射そんじて、もしお怪我があっては申訳がないとばかり思っておりました」と心浄かに話すのだった。

此の虎の皮は閑院宮殿下へ記念として献上され、殿下はいたく感激あそばされたという。

それから後は当地で一躍話題を呼び、次々次々に話しに尾ひれがつき、いつしか大正の清正のような武勇伝として語り伝えられたが、三宅氏はあくまで謹厳実直なお人であったという。

宗像大社歌会

俳句作品集（八十六）

看護婦のみめよし雑煮はとび来る　門司　永島　哲夫

歳明けて鳥の初音や陽もうらゝ　田川島　有吉　唐水

掛声で石段登り初詣　東京　小浦登利子

大洋を航く子元気や初便り　東郷　有吉　春子

水仙を手折りて如来に捧げ来ぬ　小倉　伊豆　湧泉

初便り初児の名をば贈りけり　田熊　小野　淡坡

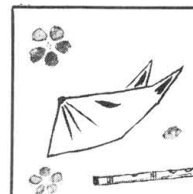
風花は門松飾り雫する　田熊　小野かをる

嵐吹くどんぐりの道子等の道　久留米　篠田太郎坊

見られいる如く晴着の初詣　佐賀　都渡　耕喜

豆拾う数もふえゆく面がゆさ　田島　末安　大孝

鳥さりてブルがうなりしあの山も



出光佐三一問一答シリーズ　(42)

働く人の資本主義

今は昔にくらべれば、文明、文化というものは非常に進歩して、物質に豊かになっているから、平和に仲よくやっているかというとそうではない。自分の権利、自由ばかり主張して対立闘争、混乱がおこり、人間が物にひき寄りまわされて物の奴隷となり、心の福祉は失なわれている。衣食足って礼節を忘れているのが現状ではありませんか。対立闘争の社会に心の福祉はありませんよ。

私は子供のころ、父から「働けけ、そしてせいたく慎んで、人のために尽くせ」と教えられたが、わがまま、ぜいたく、人に迷惑をかけるというようなことをやっている人は、心に不安を持っているのが普通であって、肉体的享楽は度を越せば心の福祉を失う。そういう意味で、心の安定一を人間の福祉といえる。

本来、日本人は清廉潔白にして責任感を重んずるとか、質素にしてぜいたくを慎めとかいうことを祖先から教えられ、そして自分のことは自分でやって、人に迷惑をかけないように心がけてきているんです。

民主主義のめざすところもここにあるのじゃないですか。自分のことは自分でやり、なお余力をもって人のために尽くすような人には労働等はいりませんよ。だから日本人は祖先が実行されたとおりに、日本人らしくやっていけばよいということです。私ども創業以来、出勤簿がないとか、賃金が、給料は発表しないなどということは、この日本の民族性を信頼し、日本人らしくやってきておったということですね。

ところが戦後の日本人は占領政策によって日本人はなれさせられているので、出光のあり方などなにか特別のことをやっているように見えるらしいんですね。

質問　最近、政治家や、官公吏の汚職がさかんに摘発されていますが、清廉潔白と公責任感ということが欠けているからでしょうね。

出光　清廉潔白というのは、どの角度から誰に見られてもやましいことがないということで、これは無私の尊い姿です。責任感とは人のため、国のために尽かげでやるということです。こういうことが日本精神ですよ。その代表が武士です。ところが武士は清廉潔白にとらわれすぎて、金をいやしむようになり、手によるのはもちろん、口にするのさえ避けるという思想が生まれた。これは物や金の奴隷になるのを避けるに急あまり、物や金を尊重し、活用することを知らなかったということですね。物質というものは、人間の福祉に欠くべからざるものであるが、その物質を一方的に排斥したがために、日本は物質文明におくれたわけです。それだから、物質の世界も認めて尊重しなければなりません。清廉潔白、責任感を重んずる昔の武士が、金を尊重することを知っていたならば、理想的な実業家になっただろうと思いますね。これがいわゆる士魂商才です。それを私はやっているわけです。

事業のうえにおいて、清廉潔白、責任感を重んずるということは、一生けんめい働いて自分のためでなく、人のため、国のために尽くす、そして命がけで公共性を発揮するということで、今日の言葉で言えば、事業の社会性ということですね。

私はこの清廉潔白とか、責任感を重んずるということが、人間にとっても、事業にとっても非常に大事なことだと思いますね。いまの教育では教えないですが、やがてこういうことがいちばん大事なんだという時代に帰っていくと思いますね。それだから私はいま、積極的にこの言葉を使っていますよ。

質問　いま、日本人が本来、道徳的な価値としてもっている清廉潔白とか、責任感などについてふれられましたが、戦後は舶来品の個人主義とか、権利とかが強調されて、そういうすぐれた日本人の道徳までないがしろにされてしまっているように思われますね。何かいまの日本人は自分の育った風土とか、歴史の特性を忘れて、外国のものさしではかる傾向があります。

出光　そうですね、日本の道徳の根本である互護互助や、犠牲なども外国のものさしではかれば、権利の放棄となり、邪道となる。経営のうえから言えば、労働組合も出勤簿も外国では要ることになるが、日本のものさしではかればどちらも必要としないということになる。日本には日本のものさしがあるということを認識する必要がありますね。その意味では、出光は試験管のなかに日本人のものさしをつくったということも言えますね。

質問　出光さんの福祉の考え方の基本は、お互いに仲よくするということですが、どうしてそういう考えをもたれるようになったのかということを考えてみますと、その根本に出光さんの生いたちや、学生時代に受けられた家族主義の影響が強くあるように思います。ところが、この家族制度も戦後はいろいろ批判され、変わってきていますが。

出光　家族主義はいまの日本では尊重されるどころではない、悪いことなっていますね。日本の家族主義というのは、家長を中心として親子兄弟仲よくすることが基本であり、日本人の「お互いに」ということの出発点なんです。そして親類、近隣、さらに社会へひろがっていくわけで、それを大きくしたものが、皇室中心として一致団結する日本民族の形である。したがって家族制度というものは、日本民族を育てるうえで非常に大切なものなんですが、戦後、これに対立闘争の思想が入ってきたのが悪い。

そういう日本人のものさしからいえば、尊い労働を金に評価する。すなわち自己のために労働を切り売りすることは人間侮辱になる。労働の切り売りは利己主義から出たものであり、無私、愛他、そして金を超越するところに労働の神聖がある。出光が給料を発表せず、俸給は生活の保障であるという理由もそこにあります。

3、日本人のお互いに仲よくする姿は家族制度のなかに育まれた

質問　家族主義というものは、やはり一つの方針を持っていろいろとその関連の問題である。

まず第一にあげられることは一つの企業体のリーダーである以上は、その経済的な成績というものは、その企業の対社会的責任を最上にもっていくという責任をもたされているという点を指摘したい。アメリカでこの企業、あるいは企業経営者の一般社会に対する責任という問題が論議されるが、この問題を取り上げて解く場合に、しばしば破算した企業というものは、その企業の対社会的責任を果し得ないことだということを忘れることが多い。

企業経営者の責任というものは、財貨、役務をつくり出して、そして自分の業界内、あるいは国家社会内において最上の成績をあげて行く。そしてあしたの発展のための資本というものを蓄積するにあるといってよい。こういった企業体、経済的責任を十分に果さずにいる企業体というものは、いかにほかの面で社会に対していろいろ奉仕しても、あまり社会の益にはならないといってよい。これは必要性は、特に最近のように単なる国家経済機構内に尊すのでなく、国際経済の場に進出している場合によりいっそう考える必要がある。

（つづく）

経営とは何か

PFドラッカー

の企業内における経営の問題を取扱って一つの指導者的な動きをする。特に最も少ない資源である優秀な技術をもった人的資源をかに有効に、経済的に使うかということについて、頭を使い、その手腕を発揮するわけである。

また一つの企業体というものは、決して孤立しているものでなく、国家社会あるいは地方社会の一員である。企業とその環境との関連においてビジネス・リーダーシップというものは、自分としての責任というものがある。

そこで問題となる点は、社会一般はこうやって現代社会、特に高度に発展してきている社会において、台頭してきているビジネス・リーダーシップに対して何を期待しているか、どういうことをやってもらいたいと願っているかという問題点である。

導的立場をとる以上は、リーダーシップというものは、やはり一つの方針を持っていろいろとその関係を調整していかなければならない。

こういった三つの面において指

話百生先師庵藪像宗

南方

華やかなりし頃

宗像太郎坊

その頃、私は石膏にピストル、左にはネシアのクリスKaris（剣）をさして自分もその気になって、ふん反りかえって歩いたものである。金子が出来、馬賊の親分となる中国とは、違った味のある民族である。このころのネシア人は意識であり教育もなかったので、すこし身体が積極的に動き、頭の回転のある者は、すぐに立まうのれたものである。日本人はこういう条件をそなえているので、戦後、逃亡兵は重宝がられ一廉の者になり、村長の娘等、よいところから嫁をもらっている。

戦前では大正三年（一九一三）アチオ戦史の最後のページに活躍した日本人がいる。アチエ人という民族は剛悍で、王国をつくり、三千年の間、オランダ軍に反抗し、降伏後も折を見ては、オランダ人の殺害等を企てた。だから、大正十三年（一九二四）までアチエ州だけには軍政をしていたのである。

このアチエ人とともに、闇軍と戦った熱血漢は、佳元彦といって今もなお土人の間に語りつがれている人である。

アチエ州の中部、峻険な山岳地帯のガヨ族の住んでいるところ、パンマナムという若い酋長が数千の兵を率いて蜂起した。すでに蜂兵たちにおよぶが、いつも参謀長としてその雄幟があったが、この佳元彦であった。ある時は、花の如き美女をコントロールの閨中に送って暗殺したりした